

ドル/円相場のトレード戦略

■ 中長期展望

注目されていた英国の国民投票の結果は、大方の予想を裏切る EU 離脱となりました。ドル/円相場は直近の安値103円55銭をあっさり割り込み、2013年11月以来の100円割れとなり、一時99円ちょうどの安値まで下落しました。

【ドル/円 週足】



英国の EU 離脱は世界経済の先行き不透明感を強め、また米国の早期利上げを妨げるものと捉えられており、中期的にドル/円は円安に大きく戻る見通しはとて描けず、95円割れをもイメージする必要が出てきました。

95円水準は、2011年の安値から2015年の高値の61.8%戻しとなっており、当面のドル/円の下値の目処となります。

ただし、52週移動平均との乖離で見ると、6月24日につけた99円では約15%の下方乖離となり、リーマンショックを受けドルが下落した2008年の下方乖離とほぼ同じ水準になりことから、過度な下がり過ぎの反動での短期的なドルの戻りも期待され、また日本のヘリコプターマネー政策への思惑が円の上値を抑える要因となっていたことから、100円～110円のレンジ相場の継続が意識されてきました。

しかし、9月の日銀の金融政策会合で緩和策に手詰まり感が露呈されたとの見方が強まっており、米国の年内利上げ観測がドルを下支えする要因となるも、年末に向けて円高が進むリスクがやや高まってきたといえるでしょう。

ドル/円相場のトレード戦略

■ 短期展望

先週は、日米の金融政策決定会合をこなし、米国サイドは市場の予想通り現状維持としたものの、日本サイドは市場が期待していたマイナス金利の深掘りには踏み込まず、「イールドカーブコントロール付き量的・質的金融緩和、オーバーシュート型コミットメント」という新たな枠組みを打ち出しました。

しかし、この新たな政策は、日銀の手詰まりを現したものと評価され、一時100円割れを試す水準まで円高が進みました。

今週も先週からの流れが続いており、ドルの上値は非常に重い展開となりそうです。

米国の年内利上げ期待から急激な円高の進行は避けられると思われ、今週に関しては99.50円～102.50円のレンジでの小動きを想定しますが、年末に向けてドルの下値リスクが高まる可能性には留意しておきたいところです。